療養場所の違いに応じた認知症者のエンドオブライフケア充実に向けての調査研究
－COVID-19 流行の影響も踏まえて－

研究分担者　大河内 二郎　介護老人保健施設　竜間之郷　施設長

研究要旨
老人保健施設は施設サービスだけではなく通所リハビリや訪問リハビリ等のサービスを提供していることから、在宅の、より軽度な障害を負った時点から今後の生活を支えている。つまり老健施設では、単なる終末期の看取りだけではなく、対象者が元気なうちから残りの人生をどこで、どのように生きるのかということも含めて支援が可能な側面がある。従って単なる終末期医療“End of Life care“ではなく、”Life Care”と考えることにより、よりそれぞれの利用者の個別性に立ったマネジメントが可能である。

A．研究目的

老人保健施設における看取り、ＥＯＬケアについて、記入式調査を行うとともに、これまで老人保健施設で行われた看取りに関する調査研究事業を収集し、今後の老人保健施設での看取りケアの充実。改善に役立てる。

B．研究方法

１．認知症者に対する意思決定支援および緩和ケアに関する調査のため記入式調査を郵送にて行った。
２．老人保健施設における看取り、ＥＯＬケアについて、これまで行われた研究事業を再度検討した。
（倫理面への配慮）
施設における調査は匿名で行われた。

C．研究結果

施設における調査では170の老健施設から回答があった。詳細は別途報告されている。このほか全国老人保健施設協会がこれまで行ったＥＯＬに関する研究を整理した。

D．考察

介護保険法により介護老人保健施設（以下、老健施設）の対象者は、「要介護者であって、主としてその心身の機能の維持回復を図り、居宅における生活を営むための支援を必要とする者」である。したがって、老健施設は入所しつづける施設ではなく、居宅での生活を維持しつつ、リハビリ等の目的で施設利用をする高齢者に対して総合的なサービスを多職種で行っているという特徴がある。その中で、老健施設を繰り返し利用している中で、最後を老健施設での看取りを行うことになる高齢者が増えている。2017年には約7割の老健施設が看取り機能を有していた。老健施設における看取りの満足度調査では約9割の利用者の家族が看取り後に満足と答えており、その施設側要因としては、多職種での利用者への説明と、より早期の看取りへの説明等が要因として挙げられた。

また老健施設は通所リハビリテーションや訪問リハビリテーション等のサービスを提供していることから、在宅の、より軽度な障害を負った時点から今後の生活を支えている。つまり老健施設では、単なる終末期の看取りだけではなく、対象者が元気なうちから残りの人生をどこで、どのように生きるのかということも含めて支援が可能な側面がある。従って単なる終末期医療“End of Life care“ではなく、”Life Care”と考えることにより、よりそれぞれの利用者の個別性に立ったマネジメントが可能になると考えられる。

E．結論

介護老人保健施設における終末期医療についてデータ収集を行うとともに、介護保険施設におけるEOLについて考察した。

F．研究発表

1.　論文発表
1）　大河内二郎　東憲太郎　介護老人保健施

設における余命が限られた方々へのサービス提供　医療と社会 Vol.33 №1 2023 in press

2. 学会発表　なし

G．知的財産権の出願・登録状況

なし